「住総研 研究･実践選奨」受賞評

研究 No.1818　　主査　森 太郎

寒冷地における性能向上リフォームの適用拡大に向けた研究

本研究では、寒冷地である北海道において、劣化状況を含む改修前の住宅性能の実態調査に加えて、性能向上リフォーム適用後の劣化状況の調査を実施するとともに、リフォームの関しての経済的な負担軽減策についての詳細な検討を行った労作である。特に寒冷地では温暖地と比較して、必要な断熱性能を担保するためのリフォーム費用が新築並みにかかることが問題となっており、このハードルをいかに下げていくのかを綿密な調査とシミュレーションによって解決しようとする試みは大変有意義である。

既存住宅の竣工年代別の評価という視点も加えて、過去のスタンダードであった断熱性能をもつ住宅の経年的な劣化状況の把握をしており、その際にも居住者が住まいながらの熱損失係数の推定方法を検討するなど、意欲的な試みがなされている。住宅性能が劣る住宅ほど暖房費節約のために夜間の暖房停止などの部分間歇運転がなされ室温変動が顕著であるといった住宅におけるウェルネス性能の検証にまで及んだ検証成果はとても興味深い。さらにはリバースモーゲージ等を考慮した詳細な住居改修関連費用のシミュレーションを行っている。

以上の理由により、本論文を「研究･実践選奨」として選定した。

実践 No.1823　　主査　佐藤 圭一

備後(びんご) 中継表(なかつぎおもて) の織機再生と製織技術継承

広島県の尾道・福山近辺の地域は、畳に用いる 藺(い)草(ぐさ) の産地として知られている。その地方で生産される藺草を使った畳表は「備後表(びんごおもて)」と呼ばれ、高級な畳表の代名詞となっている。畳表の中央で藺草を継ぐ「中継(なかつぎ)」と呼ばれるものは、最上品として扱われている。近年の生活変化や床に使う新建材の登場で、畳の需要は激減し、国内の藺草生産量も激減、中継の備後表(備後中継表)は、存続の危機に立たされている。

そうしたなかで、備後中継表の製造技術を継承するために取り組まれたのが本実践研究である。本実践研究の主査たちは、「藺草栽培を通じた備後表の生産・流通・設計・施工プロセスの解明」という研究課題を掲げ、その取り組みのための組織（備後地域遺産研究会、備後表継承会）を立ち上げ、課題に取り組んでいる。本実践研究は、その一環として備後中継表の織機の復活を目指したもので、その成果は、機械の権利調整からはじまり、機械の補修による動態保全、実際の製織、記録の作成といった様々な事柄に及んでいる。結果報告では、主査たちの研究・取り組みやそのなかでの本実践研究の位置付けを、時系列にそって詳細かつ明瞭に紹介している。

今後も、畳（中継表を含む）そのものの需要の掘りおこしや藺草栽培の継承をはじめ、取り組むべき課題は多々あり、簡単な道ではないと思うが、主査たちのさらなる発展が期待できる活動であり、非常に意義ある優れた内容を持つ実践研究として高く評価し、「研究・実践選奨」に選定した。

「住総研 研究･実践選奨 奨励賞」受賞評

研究 No. 1824　　主査　園田 眞理子

地域善隣版モクチンメソッドの開発・実装―生活困窮者の住まいの質的改善を目指して―

人口減少による住宅需要の低下で、空き家やアパートの空室が社会問題となっている半面、一人暮らしの高齢者や障害者、外国人など住宅確保に困っている人たちがいる。なぜマッチングができなのか、社会的要請の強い課題である。

地域善隣活動に関わっている園田さんと、「モクチンレシピ」によるアパート再生を展開してきたモクチン企画の連さんがコラボして、実践を通して、その障壁を明らかにし克服しようと挑んだ。生活困窮者だからといって「住めればどこでもいい」というものではなく、空きアパートに借り手を見つけるには明るくこぎれいな部屋に改修する必要がある。ビジネスとして成立する潜在的可能性はあるが、リスクを負ってまで改修資金を出すという家主を探すのが難しいことがわかった。

実装２物件のうちひとつは、接道のない６畳一間のアパートで、モクチン企画にきた依頼だ。改修後、ベトナムからの技能実習生４人がシェアしているという。このような入居候補の若い外国人労働者を改修の担い手として組み入れることができれば、老朽化して放置されている空きアパートが全般的に手入れされていき、高齢者にとっても前向きになれる明るい住まいへと変貌し、活用されるようになるかもしれない。価値ある研究成果が認められ、「研究・実践選奨」に選定した。

実践 No. 1820　　主査　森田 直之

高校生と商店街の協働による地域再考と商店街活性化のための取組

本実践研究は、高校生が商店街で働く人たちにインタビューし、仕事とひとの魅力を高校生らしい感性溢れるポスターに表現して展示することで、地域の人々に地元の商店街の魅力を再発見してもらう取り組みである。高校生が制作したポスターは、商店街で働く人柄がにじみ出ていた。

本実践研究は、高校生を対象とする地域学習であるが、その一方で商店街の商店主らに自分たちの個々の店舗の仕事の魅力を再認識してもらう成果につながっている点が高く評価された。参加した高校生らも、この活動を通じて、商店街に見方がかわり、自らの仕事観にも変化が見られた。活動の企画・運営は、この実践研究の主査である高校の先生であるが、夏休みをつかって、この活動に熱心に参加した高校生諸君の力も称賛に値する。

実践活動の過程では、高校生らの活動の実施やポスター展示に対して、商店街全体の合意形成はなかなか難しく、実施の困難が発生したが、一つ一つ課題を乗り越えて、ポスター展の開催にこぎつけた。

地元商店街との協議課題のプロセスを明らかにしたことは、今後の活動の発展につながる知見である。高校の先生と高校生のコラボレーションによる本活動が、ますます発展することを期待したい。

以上の理由により、本論文を「研究･実践選奨 奨励賞」として選定した。

実践 No. 1826　　主査　**松田 まり子**

蒸暑地域の住まいにおける「外皮」概念の再編と沖縄モデルの提示

本研究は、建築設計者の活動団体である「沖縄の気候風土適応住宅連絡推進会議」による蒸暑地域の住まいづくりの原則の整理と、国の省エネルギー施策に対する改善要求の活動によるものである。省エネルギーで熱的に快適な住まいを実現するために断熱気密が特に重要視される北海道や本州といった日本国内の他の地域と一線を画しているのが沖縄の気候である。

これまでに提案者のグループは様々な活動を通じて、沖縄のエネルギー消費には断熱性能よりも冷房期の平均日射熱取得率が大きく影響することを確認している。小規模住宅を含むすべての新築住宅で省エネ基準への適合を目指すことが推奨されている現在、沖縄県に代表される 8 地域の気候区分における住宅のあり方を正しく発信していく活動は有意義である。

また、研究成果に基づく冊子の作成、公開研究会の実施、住まいづくりの提言などの積極的な活動を通じて、蒸暑地域における住宅設計の原則を示し、省エネ基準の課題を明らかにし、建築設計者に対して課題についての理解を促し、また省エネ基準の改善のための働きかけを行っており、充実した研究内容と認められる。

以上の理由により、本論文を「研究･実践選奨 奨励賞」として選定した。